

広島女学院大学総合研究所年報

〔電子版〕

Vol. 28



広島女学院大学総合研究所

2024

目 次

I.	はじめに.....	所長 森保尚美	(1)
II.	2023 年度広島女学院大学学術研究助成【研究概要報告書】 ◇個人研究◇ [一般] ・ 日常生活の暮らし方や食物の記憶が食欲に影響を与えるかの検討.....	石長孝二郎	(2)
	・ 中世王朝物語における『源氏物語』語彙索引の作成とその活用に関する研究.....	小松明日佳	(4)
	・ 自己の成長の実感が動機付けを高める授業開発研究—成長の可視化と促進—.....	中島義和	(5)
	・ Evaluating the pedagogical return of an XReading subscription based on vocabulary size gain using the Vocabulary Levels Test designed for beginner and intermediate language learners at a Japanese university.....	大崎美佳	(7)
	[学術図書出版] ・ 『学級づくりの工夫のたからばこ 教師としての信念・ビリーフをかたちにして』.....	細 恵子	(9)
III.	2022 年度広島女学院大学学術研究助成【研究成果報告】.....		(10)
IV.	2023 年度広島女学院大学学術研究助成【交付一覧】.....		(12)
V.	2023 年度科学研究費助成事業【交付一覧】.....		(13)
VI.	関係規程等.....		(14)

I. はじめに

所長 森保尚美

本研究所は、広く人文・社会・自然の諸領域にわたる専門の学術理論及び応用に関する総合的な研究を行い、学術・文化の創造と発展に貢献すると共に地域社会の進展に寄与することを目的としています。目的を達成するために、研究報告書の編集・刊行や、大学論集の編集・発行、広島女学院大学学術研究助成費、科学研究費補助金等公的研究費の運営・管理などを行っています。

さて、2020年に始まった新型コロナウイルスの感染拡大により、研究者の計画は変更を余儀なくされ、見通しのもてない状況に追い込まれて学術助成への応募数は激減しました。しかし、コロナ禍においてもなお、新しい授業形態に取り組みながら地道な研究報告が続けられ、2022年度には応募件数が増加、2023年度には国内外において自由な研究活動を再開する姿がみられるようになりました。

本報告書は2023年の広島女学院大学学術研究助成に係る成果報告書です。これまで、困難な状況におかれながらも研鑽を続けてこられた研究者の意志と努力の結晶であると言えます。ぜひご高覧いただければと存じます。

2023年度の具体的な申請状況ですが、広島女学院大学学術研究助成は、新規個人研究が1件、継続研究が3件、学術図書出版助成の申請は1件でした。学会特別助成は申請がありませんでした。

次に、2023年度の科学研究費助成事業の採択は新規が1件、継続研究（研究代表者）が6件、繰り越し延長が3件、継続研究（研究分担者）が1件の結果となりました。また、『広島女学院大学論集』については、2023年度版（第71集）は国際英語学科、日本文化学科、児童教育学科の3学科から3件の論文を掲載いたしました。

2023年度の倫理審査申請数は、9月に5件（通常審査）、3月に14件（通常審査5件、迅速審査9件）合計19件であり、2021年度の18件、2022年度の22件に並ぶ結果となりました。公的研究費の不正行為防止の働きかけや、研修推進がなされたことによって、研究倫理意識が高まっている傾向であると捉えられます。

コロナ禍以降、本学においてもweb会議ツールや学習管理アプリの活用が急速に浸透し、研究事務にも会計システムが取り入れられました。2023年9月には、「授業等における生成AIの使用に関するガイドライン（ver.1.0）」が定められ、学びの環境は変化・発展を続けています。一方で、開発されたコンテンツを十分に吟味せずにシステムに巻き込まれていくことへの危惧や、人が集まって対話をしながら研究をしたり自由に活動したりすることへの意識の変化など、新たな問題が立ち現れています。

2024年度を迎えた今、教育や研究についてあらためて見つめ直し、研究活動の推進と、地域社会への貢献に努めていきたいと思えます。喫緊の課題としては、教育業務時間と学術研究時間のバランスが挙げられます。また、安定した研究のために科学研究費補助金や公的補助金の採択に向けた研修支援に取り組んでいく所存です。今後とも、みなさまのお力添えをどうぞよろしくお願い申し上げます。

Ⅱ. 2023 年度広島女学院大学学術研究助成

【研究概要報告書】

〔個人研究-一般〕

日常生活の暮らし方や食物の記憶が食欲に影響を与えるかの検討

人間生活学部 管理栄養学科 教授 石長 孝二郎

1. 研究の目的

レクリエーション時の室内へのにおい散布なし（無臭）、におい散布あり（鰻蒲焼、白檀）により、食欲および達成感に影響を与えるかを把握するとともに、日常生活のレクリエーションの活動状況とその際の身体状況及び気分状態が食欲に影響を与えているかを探索することを目的とした。

2. 研究方法

対象は女子大学生とした。用意した昼食を喫食させ、15時から問診とバイタルサイン測定、続いて今の食欲程度、食物を嗅いだ際の快・不快をビジュアルアナログスケール(VAS)で評価し、今の気分はPOMS[®]2 成人用短縮版で評価した。その後、レクリエーションを1時間実施し、活動後の達成感を評価した後に開始前と同じ項目を再調査した。

3. 結果

室内へのにおい散布有無による食欲の程度に違いはなかった（におい散布なし VAS65.3 点、鰻蒲焼 VAS68.0 点、白檀 VAS72.8 点、 $p=0.665$ ）。レクリエーション活動における食欲増進については、レクリエーション後はレクリエーション前と比較して食欲が増進したが、レクリエーション活動のあり・なしの間では有意差は認められず、この食欲増進は単純に時間経過に起因した可能性が考えられた（レクリエーション後の食欲の程度；活動ありの食欲 VAS65.3 点、活動なしの食欲 VAS54.6 点、 $p=0.384$ ）。しかし、食欲とバイタルサインとの関連では活動後に食欲の程度と体温に正の相関が認められた（ $rs=0.456$, $p=0.015$ ）。また、食欲と気分との関連では活動後に食欲の程度と気分の“活気・活力”に正の相関が認められた（ $rs=0.375$, $p=0.049$ ）。

4. 結論

食欲に影響を及ぼす因子は、日常生活の中で“活気・活力”がわくことを見つ

けることと自分の適切な体温を維持することである。

5. 成果の公表

特定非営利活動法人日本栄養改善学会の栄養学雑誌 Vol.82 No.1 (2024) に「活動中の香刺激が日常生活でのレクリエーションによる達成感および食欲へ及ぼす影響」で掲載される。

〔個人研究—一般〕

中世王朝物語における『源氏物語』語彙索引の作成とその活用に関する研究

人文学部 日本文化学科 専任講師 小松 明日佳

1. 研究目的

「中世王朝物語」と呼ばれる鎌倉期を中心とする物語群は、社会的認知度が低く、文学史を構築する一部でありながらも、これまで研究対象とされることが少なかった。基礎研究、特に索引が十分に整備されておらず、研究を行う上での障害となっている。中世王朝物語においては、先行する『源氏物語』の影響が特に強いと考えられており、『源氏物語』の受容は、中世王朝物語の研究における最大ともいえる観点になっている。

そこで本研究では、中世王朝物語の研究を推進するために、『源氏物語』の受容という観点を踏まえ、『源氏物語』の語彙を基にした中世王朝物語の索引を作ることを目指す。『源氏物語』の影響を語彙において明らかにする索引は、中世王朝物語の研究を推進する一助になると考えられる。作成した索引を活用することによって、中世王朝物語を総体として捉えることが可能となり、その研究成果は索引の有用性を示すことにも繋がると考えている。

2. 研究方法

索引の作成においては、『中世王朝物語全集』（笠間書院、1995～刊行中）を底本とする。索引の見出し語としては、報告者によるこれまでの研究の過程で中世王朝物語における『源氏物語』受容として特に重要であると判断された語を取り上げる。具体的には、「癖」「らうたし」「気高し」「愛敬」の4語である。上記の4語を取り上げた後も、中世王朝物語において『源氏物語』受容の観点から重要と考えられる語を順次取り上げる予定である。その際、参考として、『源氏物語大辞典』（秋山虔・室伏信助編、角川学芸出版、2011）を用いる。

また、上記4語を用いた作品の考察も行う。考察の観点としては人物造型を取り上げる。これは、人物造型が『源氏物語』受容の中でも物語の核として特に重要であるためである。索引を活用し、中世王朝物語を総体として捉えることを目指す。

3. 研究経過

索引の作成については、作業が予定より難航し、現在、『中世王朝物語全集』の本文テキストデータを作っているところである。作品の考察については、「癖」を抽出、分析し、その成果を学会で発表した。今後、改めて論文にする予定である。また、上記4語以外にも重要と考えられ得る語を見出したため、これも含め今後考察していく予定である。

4. 研究成果の公表

索引については、公表先は未定だが、学術雑誌に投稿する予定である。作品の考察については、前述の「癖」という表現について、学会での発表を行った（『我が身にたどる姫君』『恋路ゆかしき大将』における「癖」と「本性」についての一考察 —『源氏物語』変奏の一端として—（第73回西日本国語国文学会（長崎歴史文化博物館）、2023年9月））。

〔個人研究—一般〕

自己の成長の実感が動機付けを高める授業開発研究—成長の可視化と促進—

人文学部 国際英語学科 准教授 中島 義和

1. 研究の目的

学生（児童・生徒：以下、学習者）が自ら成長を感じることができ、それを表現することで可視化され、さらに次への学びを駆動させる動機となる授業プログラム・コンテンツの構想・開発・実践・省察を本研究の目的とする。

2. 研究方法・概要

本研究は、学習者の学習への動機付けを高めることを目指す授業開発と実践の助成を受けての研究としては最終年次となる。本年度は、学習者の成長実感を促進する教師の動機付けに焦点化し、教師への面接調査や対話型セッションを実施し、そこから授業づくりの工夫や教師の信念へのアプローチを試みた。

また、中学校教員との教科横断的な授業研究実践（「We Are the World を通してアフリカを考える」（文部科学省教育課程実践検証協力校事業、お茶の水女子大学附属中学校、2024 年 1 月 22 日）も行い、自ら学習者の成長実感を目指す動機付けの工夫を実践した。

3. 研究経過と概要

各小課題について、下記の通り研究を進めた。成果発表の欄には、「4. 研究成果の公表発表」に示した、各小課題に関連する学会口頭発表や論文等を記号で示した。

小課題	主な研究対象	研究内容	成果発表
【1】英語科教員志望学生および若手教員にみられる意識変容と成長に関する研究	「英語科教育法」受講学生、英語科教員、小中高の英語科の授業	・関連担当科目における学生への質問紙プレ・ポスト調査と結果分析 ・小中高教員（30 名程度）への面接調査と学校訪問・授業観察、共同研究の実施（夏と春のフィールドワーク実施） ・「地域連携文化セミナーⅠ」「英文法Ⅱ」「英語科教育法」	教職・教師 A・⑤、A・⑦、B・⑩、B・⑫
【2】学力多様性への対応を志向する第二言語習得論に基づいた英文法授業開発研究	「英文法Ⅱ」受講学生、英語科教員、小中高の英語科の授業	「キャリア・スタディ・プログラム」の各科目の授業構想・実践・省察、学生の成果物の見とり、抽出学生の面接調査実施 ・学会等発表 8 本 ・論文執筆 4 本 ・MISC 執筆 5 本 等	英文法・英語教育・授業づくり A・①、A・②、A・③、A・⑥、B・⑨、B・⑪
【3】大学におけるアクティブラーニング型活動に関する実践研究	「地域連携文化セミナー」等受講学生、中高教員、教科等横断的・協働的課題解決型の授業（英語科を柱として、総合的な学習の時間や特別活動も視野に入れて）		AL・教科等横断・協働的課題解決 A・①、A・②、A・③、A・④、A・⑧、B・⑨、B・⑪

4. 研究成果の公表

研究主題の鍵でもある「成長」を核に、学習者及び教師を対象に、教科・領域等を横断する視点で研究を進め、それらを学会の性質等に合わせて発表した。

A) 学会口頭発表および論文集等

①中島 義和「進路指導・キャリア教育的視点を意識した英語科創作表現カリキュラム—学

習経験者との対話型リフレクションから探る実践の意義と価値―」、中国地区英語教育学会 第 54 回大会 2023 年 6 月 24 日、広島大学

②中島 義和「英語科と総合的な学習の時間をつなげる SDGs カリキュラムの開発―『ノシ アック』サイクルで学習者の学習動機・WTC の向上を目指して―」、日本国際理解教育学会 第 32 回研究大会 2023 年 7 月 2 日、名古屋学院大学／『日本国際理解教育学会 第 32 回研究大会 研究発表抄録』 pp.150-151

③中島 義和「主体的・対話的で深い学びの創出を目指す教科等横断的な創作表現活動の実 践研究―対話型リフレクションから活動の意義と価値を探る―」、全国英語教育学会 第 48 回 香川研究大会 2023 年 8 月 19 日、香川大学／『第 48 回全国英語教育学会 香川研究大会 発表予稿集』 pp.114-115

④中島 義和「大学における『総合的な学修』の授業づくりを考える―地域連携型キャリア 教育科目の構想と実践―」、日本教科教育学会 第 49 回大会 2023 年 10 月 7 日、弘前大学／ 『第 49 回 日本教科教育学会 全国大会 論文集』 pp.119-120

⑤中島 義和・寺本 誠「教科教育法・教育実習事前指導のカリキュラム検討―教育実習経験 者への調査結果に基づいて―」、日本教育方法学会 第 59 回大会 2023 年 10 月 14 日、慶應 義塾大学／『日本教育方法学会 第 59 回 大会発表要旨』 pp.70-71

⑥中島 義和「児童生徒が考えて表現する授業づくり」(教科等本来の魅力に迫るための教師 の資質能力―児童・生徒の変容の見取りを通して―)、令和 5 年度 東雲教育研究会(広島大 学附属東雲小学校・中学校)外国語科部会 2023 年 11 月 18 日 招待有り

⑦中島 義和「教育実習生に変容と成長をもたらした困難な経験を探る―M. Agar の Rich Points と Languaculture の視点から―」、中国四国教育学会 第 75 回大会 2023 年 11 月 25 日、 広島大学

⑧中島 義和「『対話』を通した学びの創造―幼稚園での保育体験科目での試み―」、日本教 育実践学会 第 26 回研究大会 2023 年 12 月 3 日、上越教育大学／『日本教育実践学会 第 26 回研究大会 論文集』 pp.100-101

B) 論文発表

⑨中島 義和 (2024a)「『個別最適な学び』への動機づけを促進する教師の実践の考察 ―生涯にわたる自律的な学び手の育成を目指して―」、『広島女学院大学論集』第 71 号、pp.1-20

⑩中島 義和 (2024b)「『三つの対話的实践』の視点でのリフレクション分析研究―英語科の 模擬授業実習経験に自己の成長を見出すことを目的として―」、『広島女学院大学大学院論 叢』第 1 号、pp.1-15

⑪中島 義和 (2024c)「キャリア観形成への貢献を目指す英語科の創作表現活動カリキュラ ム ―学習経験者による対話型リフレクションから実践の意義と価値を見出す―」、『広島女 学院大学人文学部紀要』第 5 巻、pp.17-39

⑫中島 義和 (2024d)「教育実習生に変容と成長をもたらした困難な経験を探る ―M. Agar の Rich Points と Languaculture の視点から―」、中国四国教育学会編『教育学研究紀要』(CD-ROM 版) 第 69 巻

〔個人研究—一般〕

Evaluating the pedagogical return of an XReading subscription based on vocabulary size gain using the Vocabulary Levels Test designed for beginner and intermediate language learners at a Japanese university

人文学部 国際英語学科 専任講師 大崎美佳

1. 研究の目的

学生が英語力を高めるための方法の一つに多読法がある。多読法とは、辞書を使わずに推測しながら大量に計画的に読むことで読解力と素早く読む力をつける方法である。

コロナ禍において 2021 年度より X-Reading というデジタルライブラリーを使った多読活動を授業課題として取り入れる中、2022 年度からは特にこの X-Reading を全学共通教育である「基礎英語」の授業の一つの柱として位置づけることを踏まえ、その成果を詳しく検証し可視化することで今後のより効果的な活用方法に活かすことを目的とする。

2. 研究方法

本研究は、学生が X-Reading を始める年度初めから年度末まで年 3 回、5 つのレベルの語彙テストの結果を 2 年間記録し分析する。また、学生の学習意欲を高めるためには、英語を読む楽しさや英語力が向上しているという実感を持つことが大切である。そのため、学生自身が X-Reading による自分の語彙力やリーディングに対するメンタル面の変化を確認する作業を行い、テスト結果と質問調査の両方を研究対象として、データの分析を行う。

また、テスト取り組み時間の変化や X-Reading での獲得文字数とも照らし合わせて、様々な視点からその相関関係を調査する。それにより、より詳しく読書量と多読法、その意義と学生の成長を見とることができる。その結果を踏まえて、さらに効果的な X-Reading の活用方法を見出し授業に活かしていくことを目指す。

3. 研究経過と概要

年 3 回、Paul Nation (1993) により形成され、それを基に作られた日英バイリンガル用レベル別語彙テスト (McLean and Kramer, 2015) を、国際英語学科の学生と、英語を専攻していない他学科の学生に実施した。また、リーディングに対するメンタル面の変化も重要であると考え、Yamashita (2004) の読みに対する態度の質問を基にした調査も合わせて実施した。さらに、今年度はデジタルライブラリーと学校図書館利用に対する学生の意見調査も加えることで、より効果的な多読活動の推進方法の模索も試みた。

その結果、全ての学科において語彙力が向上し、特に X-Reading を初めて行った 1 年生については、明らかな語彙力およびメンタル面での向上が見られる。また、テスト所要時間も大幅に短縮されていることから、読解力や読み取る速度を含む総合的な語彙力の向上に効果があったと考えられる。

今後は、デジタルライブラリーを活用した多読活動での語彙力向上への有効性の考察を深めるとともに、X-Reading のさらに有効なシステム構築を目指したい。

4. 研究成果の公表

(学会口頭発表)

大崎美佳、「デジタルライブラリーを活用した多読活動での語彙力向上への有効性の考察—X-Reading のシステム構築の試み—」、中国地区英語教育学会 第 54 回大会 2023 年 6 月、広島大学

2022 年度は、語彙テストのデータ分析を基にした成果に絞り発表を行ったが、2023 年度の研究成果については、メンタル面の変化なども加え、さらに詳しく分析を進め、広い視点から相関関係を明らかにした発表を行う準備を進めている。

〔学術図書出版〕

細 恵子・中島 義和・紀村 修一 著

『学級づくりの工夫のたからばこ 教師としての信念・ビリーフをかたちにして』

(溪水社 2024 年 1 月発行)

本書では、大学で教員養成に携わる 3 名の著者が、若手教師や教師を目指す学生、困難な課題に悩む中堅教師に向け、学級づくりの方法を多角的に紹介している。著者の紀村は各章の第 1 節を、細は第 2 節を、中島は第 3 節を担当している。

本書の特徴は以下の通りである。

- ① 3 名が、学校現場での経験を基に教員養成の立場で、これまでの自らの学級づくりの実践を具体的に紹介していること。
- ② 文章と子どもの写真、教師の作成物、子どもの作品等から、子ども同士の関わりの姿が伝わるよう工夫したこと。
- ③ 小学校体育科・国語科、中学校英語科の専門性を基に、各教員が学級づくりにおける自分の信念を語っていること。
- ④ 小学校と中学校の学級づくりを取り上げており、小中の接続について考えることもできること。

目次

はじめに

第 1 章 関係づくり・環境づくりを意識する学級づくり・学級経営の工夫

第 1 節 学級経営の基礎・基本

第 2 節 子どもへの関わり方と子ども同士の関わり方の指導

第 3 節 「自主・自律・自治」を目指す中学校での学級づくり

第 2 章 学級・学年集団を育てる・伸ばす授業・活動づくりの工夫

第 1 節 集団の成長を促す学級経営・授業づくりの工夫

第 2 節 学び合い高め合う学級づくり

第 3 節 教師としての「信念/ビリーフ」をもつ

第 3 章 個を支え、伸ばすための様々な工夫・支援・指導

第 1 節 個の成長を促す学級経営・授業づくりの工夫

第 2 節 個を伸ばす支援・指導

第 3 節 「個」を見つめる中学校での学級づくり

おわりに

Ⅲ. 2022 年度広島女学院大学学術研究助成

【研究成果報告】

〔個人研究-一般〕

研究代表者 フェリックス・デヴィッド

テーマ Attitudinal Response and Productive Network Knowledge Assessment of using Virtual Reality in a Second Language Acquisition Environment.

成果 1) 学会誌等

David, F.

Assessing Students' Attitudinal Response towards the Use of Virtual Reality in a Mandatory English Class at a Women's University in Japan, *World Academy of Science, Engineering and Technology*, International Scholarly and Scientific Research & Innovation 17(11) 2023. pp.720-724.

成果 2) Poster 発表

David, F.

Pedagogical return on an Xreading subscription based on vocabulary gain. (Poster presentation). The Sixth World Congress on Extensive Reading 10 August 2023

研究代表者 ロバート・ドーマー

テーマ A longitudinal mixed methods study of L2 motivation in a Japanese undergraduate English program: developing intervention strategies and support systems.

成果 1) 学会誌等

Dormer, R.

Designing, Implementing and Assessing a System of Reward Certificates in an L2-Content Hybrid Undergraduate Program at a Japanese Women's University

広島女学院大学人文学部紀要 (1) 1-14 2022 年 3 月

Understanding the Importance of Role Models in L2 Motivation: Preliminary Results from a Mixed-Methods Study

広島女学院大学人文学部紀要 4 1-14 2023 年 3 月

成果 2) 口頭発表

Dormer, R.

Appraising Asset-based Community Development as ESD: Global Village 2019 Case Study IICE, HA, United States. January 5th-8th, 2023.

研究代表者 土谷 佳弘

テーマ 転写因子の転写活性非依存的な天然変性タンパク(IDP)としての新機能

成果 1) 口頭発表等

笠井 理恵子, 中野 夏紀, 土谷 佳弘

転写活性化ドメイン(TAD)による $\text{I}\kappa\text{B}$ キナーゼ β (IKK β) の活性制御機構. Transactivation domain (TAD) of regulates $\text{I}\kappa\text{B}$ kinase β (IKK β) activity. 第46回日本分子生物学会年会 2023, 神戸, 2023.12.7

研究代表者 柚木 靖史

テーマ 角筆文献を活用した授業の構築と教材用マニュアルの作成について

成果 1) 学会誌等

柚木靖史、近藤友子、石田泰子

「金光図書館蔵角筆文献の再調査—角筆文献の再整理と目録や調査法に関する今後の課題—」(『広島女学院大学論集』71集 2024年2月. PP, 1-17)

柚木靖史、近藤友子、石田泰子

「角筆文献研究が抱える課題と展望—教育的活用法と電子的記録法—」(『広島女学院大学論集』70集 2023年2月 PP, 19-37)

柚木靖史「角筆文献調査マニュアルの作成に向けて—角筆文字の見つけ方—」(『第7回テクニカルコミュニケーション・リデザイン学術研究会発表論文集』一般財団法人テクニカルコミュニケーター協会, 2022年10月15日 PP, 14-15)

成果 2) 口頭発表等

柚木靖史「見えない文字は何を伝えてきたか—凹み文字(角筆)の世界—」(広島女学院大学公開講座 2023年10月14日)

柚木靖史「角筆文献調査マニュアルの作成に向けて—角筆文字の見つけ方—」(テクニカルコミュニケーション・リデザイン学術研究会 2022年10月15日(土) Zoomによるオンライン開催)

IV. 2023 年度広島女学院大学学術研究助成

【交付一覧】

研究種目	研究代表者氏名	研究題目	助成期間	助成決算額
個人研究 (一般)	石長 考二郎	日常生活の暮らし方や食物の記憶が食欲に影響を与えるかの検討	2023	364,638
	小松 明日佳	中世王朝物語における『源氏物語』語彙索引の作成とその活用に関する研究	2022-2023	500,000
	中島 義和	自己の成長の実感が動機付けを高める授業開発研究—成長の可視化と促進—	2022-2023	491,030
	大崎 美佳	デジタルライブラリーを活用した多読活動による語彙力とリーディングに対する積極性の向上調査研究および促進と可視化	2022-2023	206,002
学術図書出版	細 恵子	『学級づくりの工夫のたからばこ 教師としての信念・ビリーフをかたちにして』	2023	660,000
計				2,221,670

V. 2023 年度科学研究費助成事業

【交付一覧】

本紙上では研究代表者への交付についてのみ報告し、研究分担者として学内外から受けた配分額については記載しない。

研究種目 審査区分	研究代表者氏名	研究題目	研究期間	直接経費 間接経費
基盤研究(B) 一般	福田 道宏	近世宮廷絵師の画系、出自的背景と宮廷社会に関する基礎研究	2020-2024	1,200,000 360,000
基盤研究(C) 一般	小林 文香	住まい手の主体的な住み継ぎや地域環境の警鐘をめざした生活知共有プログラムの開発	2018-2023 ^{※1}	0 0
	真木 利江	平和公園における建築とランドスケープデザインの記念表現の展開	2021-2023	700,000 210,000
	妻木 陽子	観光地での実現可能な食物アレルギー対応 ～ユニバーサルツーリズムの現状と課題～	2021-2024	800,000 240,000
	中村 勝美	イギリスの大学におけるチュートリアル確立と変容に関する歴史的研究	2022-2025	1,100,000 330,000
	出雲 俊江	明治～昭和戦前期における短歌教育の研究ー学習者の言葉とその交流を観点としてー	2022-2024	400,000 120,000
	森保 尚美	舞踊の模倣から音楽を複合的に知覚・感受する音楽科授業デザインの開発	2022-2025	300,000 90,000
	野間 隆文	ITAF分子の同定によるグルコセレブロンダーゼの細胞特異的・構成的発現機序の解明	2023-2025	1,400,000 420,000
若手研究(B)	妻木 陽子	食物アレルギー対応に関する地域教育プログラムの構築～社会的ニーズの把握から～	2017-2023 ^{※1}	0 0
若手研究	戸田 慧	アーネスト・ヘミングウェイの文学における「動物性愛」に関する一次資料研究	2019-2023 ^{※1}	0 0
計				5,900,000 1,770,000
直接経費・間接経費 合計				7,670,000

※1 令和 5（2023）年度は研究期間延長のため未使用額（繰越金）のみ使用し助成金交付なし。

VI. 関係規程等

【2024 年 8 月 1 日現在】

広島女学院大学総合研究所規程 2031～2032-1-

広島女学院大学公倫理審査委員会規程 2091～2091-2-

広島女学院大学 遺伝子組換え実験安全管理規程 2091-11～2091-34

広島女学院大学利益相反管理指針 2092～2092-2-

広島女学院大学利益相反管理施行細則 2092-1-1-

広島女学院大学「人を対象とする医学系研究」に関する倫理指針 2092-2-1～2092-2-4

広島女学院大学学術研究助成規程 2501～2507

広島女学院大学「論集」執筆・編集規程 2521～2522

広島女学院大学学会特別助成規程細則 2531～2532

広島女学院大学特別専任研究員規程 2541～2542

広島女学院大学における科学研究費補助金に関する規程 2551～2554

広島女学院大学受託研究規程 2561～2562

広島女学院大学における研究費の取扱いに関する規程 2571～2574

広島女学院大学における科学研究費補助金及び学術研究助成基金助成金の執行・管理に関する取扱要領

※規程の詳細に関しては、広島女学院大学総合研究所 HP(<https://www.hju.ac.jp/souken/top.html>)をご確認ください。

編集委員

森 保	尚 美	総合研究所所長（代表）
磯 部	祐 実 子	総合研究所委員
出 雲	俊 江	総合研究所委員
檜 崎	久 美 子	総合研究所委員
妻 木	陽 子	総合研究所委員
村 上	智 子	総合研究所委員

広島女学院大学総合研究所年報 Vol. 28

2024 年 8 月 1 日発行 ©

〔非 売 品〕

編集代表 森保 尚美

発行代表 三谷 高康

発 行 所 広島女学院大学総合研究所

〒732-0063 広島市東区牛田東四丁目 13-1

TEL (代)082-228-0386